

■書評

吉川 悟編
金剛出版, 2009年

システム論から見た援助組織の協働 —組織のメタ・アセスメント

八巻 秀 (駒澤大学文学部心理学科・やまき心理臨床
オフィス)

システムズアプローチの臨床家かつ論客でもある吉川悟先生が、また新たにシステム論の本を出された。今度は自らを含めて28名ものさまざまな領域で活躍する専門家を束ねての4部構成・全28章・308ページの大著である。これからの臨床家にさらに求められるであろう、さまざまな現場を見据えて・つなげる心理臨床活動を行う上での「ガイドブック」となりうる書であり、システム論的臨床を試行錯誤している筆者自身にとっても、大変勉強になった本である。

その全体構成が分かりやすい。全4部の構成を順を追ってみていこう。まず第1部「臨床現場の違いをアセスメントする」は、吉川先生による造語である「メタ・アセスメント」について、その意味や意義について述べられている。何年か前に「協働」という言葉が、心理臨床界のなかでブームになった時期があったが、そのブームも去り、今では「協働」は臨床活動における実際問題になっているように思う。「メタ・アセスメント」という言葉は、その協働活動のなかで、核となる臨床概念になりうるものであろう。

そして第2部「いろいろな現場で求められるアセスメント」。精神科病棟から始まり、児童相談所、家庭裁判所など、会社組織に至るまで、医療・福祉・司法・教育などのあらゆる領域の現場でのアセスメントについて、まさにその現場で苦闘されている専門家の方々が執筆されて

いる。どれも力作であり、それぞれの現場でのアセスメントのあり方やその傾向がリアルに伝わってくる。

第3部は「立場の違いから見たアセスメント」。学生から始まり教員、ソーシャルワーカー、医師、看護師など、自ら置かれている立場を通してのアセスメントというものをそれぞれ考察している。まさに現場でのアセスメントの「多声性」である。立場の違いによるアセスメントと実践の「偏り」が語られ、連携のための基礎資源が提供されている。

そして第4部は「臨床行為とアセスメント」。ここまでさまざまな領域や立場の専門家の声を聞いてきた内容を、総括・整理するような論文が並んでいる。特に、吉川先生が書かれている第4章「マクロとミクロを使いこなす」は、圧巻の事例報告である。まさに、この事例で行われたような援助が、より多くの臨床家によって行われるようにするために、この本が作られたのではないかと思われるほど、吉川先生自身がさまざまな機関の連携・つながを見事に行っていたケースが描かれている。この最終章を読むだけでも、この本を買う価値は十分にあると言えるだろう。

近年の心理臨床活動は、以前の密室カウンセリングと揶揄された状況から脱皮しつつあり、ますます心理面接だけにとどまらない、さまざまな援助組織をつなぐ役割も臨床家が担うようになってきている。その指標としてのシステム論的ものの見方、本書で言うところの「メタ・アセスメント」は、現代の多くの臨床家にとって、ますます必須の発想になっていくのではないだろうか。クライアントへのより良い援助のために、より幅広い援助視点をもっていくためにも、ぜひ手元に置いておきたい1冊である。

(2010年7月26日受稿)